

授業の試みについて

芳賀 啓

人文自然科学論集 第144号 所載抜刷
(2019年2月)

授業の試みについて

芳賀 啓

Abstract

Although it is generally thought that university is a place to give students lectures, the word 'lecture' originally means to interpret the meaning of books. Hence the university should be the place to have the class which contains not only the lectures but also the practice and the experiment together. I was demanded to be a performer in a lecture as a guest professor, but I decided to do a class to rather show learning and awareness of my own.

At first, I was planning to focus on off-campus learning of the student, but their purposes were taking graduation and they didn't participate in class positively nor actively learn. At the same time, lack of literacy of the students was revealed. In order to improve its ability, 'summary exercise' was done at the beginning of the class. Also, I gave them a reading list that gathers what they should read in their life, encouraged the practice of reading it and writing comments as application of the exercise to make their literacy concrete. For me four years of teaching was learning just like as Lucius Annaeus Seneca said 'homines, dum docent, discunt' (Men learn while they teach).

1. はじめに

筆者は2015年4月に客員として本学コミュニケーション学部に着任し、「表現と批評1」「地域文化論」を1年間の前期に、「表現と批評2」および「歩く・読む・書く 地図のメディア学ことはじめ」を後期に、都合4コースを担当した（うち、「表現と批評」は1・2とも2コマ連続授業）。各コースの履修生は学年を問わず、人数は年度によって異なるが平均して20名を下ることはなく、コース選択者は年度を重ねる度に増えた。2018年春は前期2コースの履修希望者が100名を超えたが、ガイダンスを経て半減以下となった。

筆者の専門は出版と地図であるが、近年は旧版地形図や古地図を用い地形と水にかかわる

地域環境をさぐることを中心としてきたため地域研究を専らとする。しかし1960年代末から70年代の学生運動の影響で筆者自身は大学教育をほとんど経験することなく今日に至り、学位も持つことはない。さりながら2006年8月から某私立大学社会教育の場で毎月つづけてきた屋外巡検公開講座や、各地の図書館や博物館などから依頼された屋内公開講座の経験から、社会教育の場における講義を大学の場で敷衍することはそれほど難しいとは思われなかつた。ところがその予測は大きく外れた。大学は講義をすればよい場ではなかつたのである。この3年半はその予測外れに対する試行錯誤の連続と言ってよいかも知れない。それを「研究ノート」として開陳することはいささかの意味をもつと思われる。

2. 講義と授業

日本における近代高等教育草創の一時期（1869年）ではあるものの「大学」が大学本校、大学東校、大学南校と鼎立していたことはあまり知られていない。講義とは専ら儒学を講じてきた江戸幕府の昌平坂学問所直系語彙で「書ノ義理ヲ講説スル¹⁾」ことであり、学問所の正統嫡子として大学本校は漢学あるいは国学の経読みとその解釈を敷衍しようとした。それに対して江戸末期の種痘所を源流とする大学東校（医学）と、幕府天文方およびその発展形の蛮書調所を繼ぐ大学南校は、翻訳（詰解）とその応用実践を速成すべく演習・実験・実技を不可欠とした。漢学と国学が葛藤しつつも洋学に対しては攻撃を専らとした大学本校の閉鎖・廃止後、大学東校と大学南校がそれぞれ東京医学校と東京開成学校の称を経て東京大学として統合され、日本の近代高等教育が「法文理医」の形を整えるのは1877年の4月であった²⁾。ここにおいて講義と演習・実験・実技を組み合わせる日本の高等教育の授業スタイルが確立した。「授業」は漢語としては「学業ヲ教ヘ授クル³⁾」ことであったが、近代以降「授産」すなわち「ショクゲウヲサヅケル」と同義ともされた⁴⁾。周知のように「理医」においてこそ演習・実験の比重は大きいものの、「法文」において授業は専ら講義であって、一般にも大学は講義の場と見做される。これに対して中等初等教育においては授業と称し、そこで講義がおこなわれることはない。授業とは実利を宣布して近代義務教育搖籃期の困難に対処する語であったと推測する、あるいは仮説とすることも可能であろう。

一方、社会教育の場においてなされる講義には、実質上二つに分けることができる。その一は大学などにおける講義内容あるいは学術上の言説等をそのままもしくは一般向けに多少かみ砕いた形で提示するもの、その二は学術的基盤とは原則的に関係なく、一定の表現を提供するものの二類型である。後者について別の言い方をすれば、それは一種の芸であり、本質において大道芸と変わることろがない。芸とは現在ではウケ狙いの見世物と理解される面があるが、「芸」の文字そのものは神事としての植樹を示した⁵⁾。その場が社稷から世俗に降りたった時点においてもそれはなお神にかかるものであった⁶⁾。ウケ狙いとは、神を殺

した挙句に客を神に擬し、その消費を企図する顛倒したポピュリズムにはかならない。大学における客員の役割とは、いわば芸の提示とそれによる啓発にあるだろう。ポピュリズムを否定しつついかる芸が披露できるか、またそれは講義であるのか授業であるのか。今言えることは講義というよりは授業であり、それも教員の学びの過程をさまざまな形で、しかも履修者が理解できることばに開き、「気付いて」もらうことにあると考えている。

ところで実際に教壇に立ってみれば、社会教育の場と大学教育の場とでは、大きな落差が存在した。前者において受講者は個々の興味と向学心をトリガーとして自ら受講料を支払い学習の場に臨むのに対して、後者にあっては大多数が学習内容や成績というより単位そのものの取得すなわち最終的には学歴の取得が目的で、極論すれば講義も授業も内実を問われないのである。たとえば筆者は成績評価方法として、履修者のリアクションと課題レポート類提出を基本とする独自のポイント制を工夫し、着任年の2期から毎学期改定を加えながら以下に示すような「評価累計表」を作成してきた。このエクセルの表作成は、質疑応答や指名音読、小演習やエクササイズ、履修・巡査レポート、発表、そして「1冊読み」レポートなどの実績を個別に、また一括して掬いあげ評価したいという動機による。そうして学習を促進する意味で履修生ごとにポイントの獲得状況をその都度示してきた。しかし単位取得の最低点60ポイントに達した途端、欠席してしまうケースがいくつも出現したのである。彼らがそれを平然と行うのは、講義や授業の魅力不足というよりも、その目的意識からすれば当

表 1 履修評価累計表

然の帰結であった。したがって、なおさらには不可避的な、換言すれば強制的な実作業を伴う講義、すなわち授業こそが重要だと思われたのである。

3. 「あらすじ演習」から「要約エクササイズ」へ

担当したのは既に示した4コースであるが、筆者は独自にそれらに共通して「歩く、読む、書く」を標語として掲げ、履修生にその都度示すことにした。屋外授業つまり地理学で言う巡査を中心とすることは招聘時の要請であったが、同等に読み書きにも重きを置くと宣言したのは、それが人間の歴史時代における学習のもっとも基礎的な部分を構成するからである。リテラシーが音声認識を中心としたデジタル領域に離陸したとしても、言語規範は厳然として残るだろう。そうして、これまで「本を読んできたか」否か、いま「本を読んでいるか」否かは、むしろデジタル時代の現在にこそ重みを増すと思われるのである。

以上の認識に関連して各コースのガイダンスの折に、履修希望者に対し独自に作成した「大学生から大人まで基礎読書200」と名づけたリストにもとづいた既読書アンケートを実施してきた。芥川龍之介『羅生門・杜子春』やスティーブンソン『宝島』などの文学作品、藤原てい『流れる星は生きている』や比嘉富子『白旗の少女』などのノンフィクション、大岡信編『ファーブルの昆虫記』などの科学エッセイをまじえた200タイトルで、そのうち85タイトルは岩波少年文庫に収録されている。青年期に達するまでにその何割かを読んでいれば、読み書きの基礎力や一定の常識は培われていると推測できる作品群である⁷⁾。再履修生も少なくないため2018年4月に限り、104名のアンケート回収結果の要点を以下に示す。

表2 「大学生から大人まで 基礎読書200」
2018年アンケート既読点数

	0点	20名	6点	4名	15点	2名
1点	13名	7点	3名	17点	1名	
2点	10名	8点	2名	21点	1名	
3点	19名	10点	4名	22点	1名	
4点	8名	11点	1名			
5点	9名	13点	5名			
		14点	1名			
計	79名	計	20名	計	5名	
	約76%		約20%		約5%	

表3 「大学生から大人まで 基礎読書200」2018年
アンケート既読上位10作品

夏目漱石『こころ』	38名
佐野洋子『100万回生きたねこ』	26名
ル・グウィン『ゲド戦記』	24名
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』	20名
『竹取物語』	16名
アンネ・フランク『アンネの日記』	15名
ヴィクトル・ユーゴー『レ・ミゼラブル』	13名
ウイリアム・シェイクスピア『ハムレット』	13名
吳承恩『西遊記』	13名
木村裕一『あらしのよるに』	12名

以上のアンケート結果からは、自ら作品を選んで読んだというよりも教科書・教材、課題図書、および映画（アニメ）の影響が大きく働いている様相が見て取れる。そうであるとすればタイトルなど5点以下しか記憶に残らないのが大半を占めるのは、実際は教科書などで読んでいても意識に残らなかった、つまりうわの空で通り過ぎた可能性が大きいため、と推測すべきであろう。そうでなければ、ゼロ回答が20%近いという数字も理解し難い。

基礎的読み（「基礎読書」）の体験が欠落ないし大きく不足している様子は、提出されたレポート類を一瞥するだけでも明らかであった。「食べれない」などのら抜き言葉、「してる」などのい抜き言葉はもちろんのこと、「きれいくない」「違うくない」などのくない言葉といった喋り言葉そのままを書いてくる例からはじまって、主語の欠落あるいは主語と述語の不一致、敬体と常体の混在、段落分けの不在、文意不明の文等々から、一定の規範的文章に親しみ、それによって訓練された時間はきわめて少なかったと判断せざるを得ない。

筆者はこうした現状を、読書の問題に直結させるのは必ずしも妥当ではないと考えている。現代日本における読書教育は文学偏重で感想文に直結するのが一般的であって、読解そのものや言語規範のトレーニングはむしろ後退するからである。表1に掲げたポイント獲得項目のうち「音読」や「あらすじ演習」などはこうした認識から始められた、まず読む、読んだ内容を確認する、ための試みであった。また表1中央の空白部は、ガイダンス時に示す書目（テキスト）リストから履修生各自が12点を選んで読書計画を立てるための欄である。すなわち「1冊読み」計画欄だが、これについては後に触れるとして、最初に「あらすじ演習」を取り上げて紹介する。

「あらすじ演習」の実際は、まずあらすじ書きの概論を示し、次に筆者が別に用意した読

み切り用の短篇のリストから履修者各自が1作品を選んでもらい、そのあらすじ書きを宿題レポートとするか、あるいはその授業の場で音読を行い、全員に一定の文字数以内でレポートとして提出もしくは発表してもらうのであるが、ほどなくして問題が明らかとなった。その第一は、後に触れる「1冊読み」レポートにおいても同様であるが、宿題とした場合、インターネット上に書かれたあらすじを利用したと思われる文章が大半を占めるのである。

すなわちそれらは作品の「落ち」ないしは結末、もしくは肝心の場面を欠落させた購買説文で、提出された文章も選んだ作品が同じであれば似たものあるいはほとんど同じとなる。原則として400字詰め原稿用紙を指定した手書きレポートであり、書き写したとしても元文がそれなりに通用している文章であるから学習効果がないとは言えないが、自力過程を欠落した結果「筋トレ」にはまったくならないのである（ちなみにこの「筋トレ」の比喩は、読み書き学習の必要性を学生に理解してもらうにはきわめて有効である）。

次に授業中に読み、その場であらすじを書くあるいは発表するプロセスを採用したものの、その作品全体をまとめたといえる例はほとんどなく、「頭でっかち尻すぼみ」スタイルの「あらすじ」に陥ったものが大半であった。読解を持続させる習慣あるいは力が不足しているため、作品の冒頭部分で息切れてしまい、全体にわたって把握し表現することができないのである。

こうした傾向に対して、作品全体を三分割して要約する三幕構成 Three Act Structure 法を紹介、提示したものの、それは逆に難しいと敬遠されたようで、実際に三部構成であらすじレポートを提出した例は稀であった。

試行錯誤のなかで、現在のところ読み書き力養成のためのもっとも基礎的で効果も反応も明らかであると思われる方法は、新たに「要約エクササイズ」と名づけた作業である。比較的大向こうの成果を目指すトレーニングは基礎力のある一定の者には可能であるが、そうでない限りはエクササイズの積み重ねしか有効な方法ではなく、またエクササイズの累積経験がトレーニングジャンプ台を用意することもあり得ると考えている。当然のことながら、これまで述べてきた読みのための作品はすべて「テキスト」であり、履修コースのテーマに沿い、かつ履修生の学習のために質量ともにもっとも効果的かつインパクトが大きいと教員が判断する作品、あるいはその一部分が選ばれなければならない。「要約エクササイズ」においてもそれは同然であって、教員の芸の一端はその選択と提示様式に現われるのである。

以下例1に示すのは、担当するコースのひとつ「歩く・読む・書く 地図のメディア学ことはじめ」で実施した「要約エクササイズ」の一例である。A3判縦長の紙の上半分はテキストで、原文から7段落を選び、下半分は原稿用紙でここに段落ごとに40字、つまり原稿用紙の2行以内に文意を要約記入してもらうのである。その際テキストのタイトルや著者名については空白欄をつくっておき、板書したものを履修者が書き取るところから作業は開始される。また事前に、黙読しながら段落ごと（例1の場合は7段落）に要約上必要と思われ

例1

全地球測位システム(GPS)の発明により、自動車の運転や飛行機の操縦、さらには路地の入り組んだ街を歩く能力は格段に高まった。ところでおれが登場する前私たちは目的地までのルートをどうやって決めていたのだろう？
近年の研究によれば、哺乳類の脳はGPSに似た極めて精巧な道路システムがあり、脳はそれを使った場所から別の場所に迷わず迷っていることが明らかになった。
スマートフォンや自動車に搭載されているGPSと同様、脳の道路システムは私たちがどうぞに向かっているかを、位置と時間経過に関する多数のデータを統合することによって判断している。脳は通常、そうした計算を難なくこなしているので、私たちはそのことにほとんど気がつかない。道に迷ったときや、けがや神経変性疾患によってナビゲーション機能が損なわれて初めて、私たちの地図作製ナビゲーションシステムがいかに重要なかに気づく。
自分がどうぞに迷う必要があるのか把握する能力、つまりナビゲーション機能は、生きていこうで重要だ。この機能がなければ、私たち他の動物も絶対してしまってはならない。
他の動物と共にすると、哺乳類は他の動物を見つけたり繁殖することができなくなる。そうした個体は生き延びられない。それどころかその動物種は絶滅してしまうだろう。
しかし小學生の力でナビゲーション機能を持つことによって、神經細胞が2億個あるのは弱くなる方向に進んでいく。
神經アソシエーションなどや高等等の神經系統を持つ動物は別の方法も使っている。その一つは、脊髄積分と呼ばれる脳の機能で、常に観たメカニズムだ。つまり、移動の向きと速さを常にモニターし、それらを積算して現在位置を把握している。この計算は物理的な目印など外界の手がかりを多用せずに行われる。脊椎動物、特に哺乳類はさらに多くの手段を使って環境内における自分の位置を認識を認知している。

哺乳類は他の動物と比べて、脳が作る周辺環境の地図、つまり脳内空間地図に大きく依存している。ナビゲーションを行っている脳内空間地図とは、動物がどのような環境のどの場所にいるかを、神經細胞集団が電気信号で表現したものだ。この脳内空間地図は主に大脳皮質で形成されると考えられている。大脳皮質はしわの寄った脳の表層部で、進化的にはかなえ景気に発達した脳領域だ。

脳内空間地図がどのように作られ、移動の際にどのように補正されているのか、過去数十年間で理解が大いに深まってきた。主に脳盲(けい)類を対象に行われた近年の研究から、脳内空間地図が数種類の特徴的な神經細胞によって構成されており、それらの細胞が曳き位置や移動距離、移動の向き、移動の速さを絶えず計算していることが明らかになつた。これらの中異なる神經細胞が共同で働くことで、脳内空間地図ができ上がる。この地図は現時点で役立つだけではなく、将来の使用に備えて記憶として保存しておこうとも可能だ。

要約エクササイズ							
3 2 1	段落1	段落2	段落3	段落4	段落5	段落6	段落7
履修日	年	月	日	作品名および著者名	1 氏名	2 学籍番号	3
2023.8.26	2023	8	26	例1	田中	1234567890	1

る箇所に傍線を引くよう、さらにもっとも重要と思う1語を楕円で囲むように指示しておく。傍線と楕円の2段階を指示するのは、あやふやな傍線だらけになる例も多いからである。

例1上段のテキストは『日経サイエンス』(Scientific American 日本版) 2016年6月号「生物のGPS」(脳内GPS)特集からの引用である。この要約エクササイズは、授業の冒頭に行うことを原則としている。何故ならば、授業冒頭では通常その前週に履修者各自から提出されたレポート類に赤字と評価点(ポイント)を記入したものを個別返却しつつ、その時点に充てるからである。レポート類返却と累計ポイントの開示を終え、履修者がおおむね要約での各自の獲得ポイント累計を示す一定の時間が必要なため、それをエクササイズ作業に充て、書き終えたころを見計らって、段落ごとに音読者を募るのである。この音読も評価点対象つまりポイントとしているため、応じる者は少なくない。ただしどこに傍線を引いたか、楕円で囲んだ語は何か、どのように要約したかを問い合わせ、また必要に応じて特定の語の意味を問う場合もある。例1の場合は第1段落1行目の「GPS」、第7段落2行目の「齶歯(げっし)類」などが質問あるいは説明語に相当する。当該者の答えが適切ではなく、あるいは誤っている場合はほかに解答を募り、答が適切であればそれに対して評価点を与え、補足説明を行う。段落ごとに教員が用意した要約例を示し、すべての段落を終えた後で履修者各自(あるいは隣と解答用紙を交換して)が要約を評価してポイントを記入する。その解答用紙を回収し、次週までに教員が評価をしなおして返却するのであるが、ともかくも要約エクササイズの回収まではその日の授業の導入部で、そこから講義や演習、発表などに移ることとなる。

要約エクササイズは、あらすじ演習と比べきわめて短い文章をひとつひとつ作業対象とするため俯瞰性には乏しいものの、確實かつ具体的で、履修生個々の反応も確認しながらすすめられる。テーマに関するエッセンス部分をうまく抄録してテキストとして提示できれば、それにつづく講義ともども当日の授業テーマに対する理解も期待できる。テーマに関しては、一定のガイドラインを示しつつシンプルで基礎的な英文を和訳させる'Short English Excercise'も併用しているが、これもきわめて有効である。しかしこうしたトレーニングは可能な限り「ボトムアップ」である必要があり、入学初年次における週5回の「基礎読書」(黙読・朗読を併用)および「エクササイズ」類の必修が望ましいと考えている。

4. 履修ポイント制と「1冊読み」について

「要約エクササイズ」の実際は以上の通りであるが、ここで履修ポイントの累計について説明補足をしておく。履修単位を取得するためには、最低60ポイントの評価がなければならぬが、これを全15回の授業で得るには平均して毎回4ポイントを獲得していかなければならぬ。ポイントはすべてレポートや応答など履修者のリアクションに対してそれが適切

な場合付与され、出席そのものはポイントにならないこと、逆に無断欠席や遅刻などの場合はマイナスポイントとすること、などはあらかじめ伝えておく。履修生の多くは、コース前半では累計ポイントが60に届かない予測となるが、表1の中央に書き込む「1冊読み」計画表にもとづき、読了結果のレポート提出がその最良の対応策であることを繰返し伝え、「読み」を促すのである。レポートを書くに際しての、用紙や書式、文字数、文字の書き方まで、常識と思えることもできれば事前に注意しておいたほうがよい。また「〇〇について書いてある」などと、肝心な内容を表現するのを面倒くさがって手抜きしたり、実際には読まずに書いたようなレポートも提出される可能性があるから、そのような場合はゼロポイントとなると伝えておく必要がある。

「1冊読み」のテキストリストについて言えば、「大学生から大人まで 基礎読書200」から「基礎読書100」へと半減させ⁸⁾、現在ではこれまで示したテキストをできるかぎり外し、履修生の数の「35」タイトルにまで選択肢を絞った(例2)。それは、選択の幅を広くしていると、明らかに読みの容易と思われるテキストに集中してしまう現象が現われたからであり、また再履修生も少くないからである。

大学生として、50年先まで生きる者として、切実に必要であろうと判断する「知」の含まれる作品のいくつかを選び、限られた時間のなかでも是非それらに触れてもらいたいと思

例2

1万年の現在読書55				2016/09/20版
A ます読み	B もうひと読み/横読みする	C	D	E
1「空」—Hiroki	ルイス・ツッカーリ 読談社文庫	トマホーク—吉田正(著)、木村政樹(訳)	トマホーク—吉田正(著)、木村政樹(訳)	映画「トマホーク」(2017)
2「おやじの記」	石井礼道子 福音館文庫	石牟礼道子著の春日井株式会社賞受賞の著の記(河出文庫)	石牟礼道子著の春日井株式会社賞受賞の著の記(河出文庫)	映画「おやじの記」
3「シ一东北最後の学生」—イライザ・フーパー	岩波現代文庫	森本考介ナダニイディアンの世界から(福音館文庫)	森本考介ナダニイディアンの世界から(福音館文庫)	映画「おやじの記」
4「おのちの食」—カーラ	森川文庫	エリック・シルバーライン著ストラーダが世界を救う(河出文庫)	エリック・シルバーライン著ストラーダが世界を救う(河出文庫)	映画「おやじの記」
5「おひなさん」	森岡英太郎 読談社ブルーバックス	藤岡英太郎著山口ひでる著の「岩井ははじめてわかるから」(講談社ブルーバックス)	藤岡英太郎著山口ひでる著の「岩井ははじめてわかるから」(講談社ブルーバックス)	映画「おやじの記」
6「お父さんの贈り物」	ロアルド・ダール ハヤカワ文庫デジタル	スティーヴン・モーリス著ハヤカワ文庫デジタル版の「おじい様の秘密」(河出文庫)	スティーヴン・モーリス著ハヤカワ文庫デジタル版の「おじい様の秘密」(河出文庫)	映画「おやじの記」
7「お父さんの贈り物」	坂谷美穂 初版文庫	野口健一著矢張りかのため(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	野口健一著矢張りかのため(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	映画「おやじの記」
8「お手本もなかった41の恋」—森森貴夫	讲談社ブルーバックス	柿食朝官中野のはな(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	柿食朝官中野のはな(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	映画「おやじの記」
9「お手本」	白川静 中公新書	白川静著山川中公著(中公文庫)「岩波少年文庫」	白川静著山川中公著(中公文庫)「岩波少年文庫」	映画「おやじの記」
10「お宝」	ブラン	ブラン著(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	ブラン著(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	映画「おやじの記」
11「お祭—恋の自然史」	コンシード・ローレンス著岩波新書	コンシード・ローレンス著岩波新書の「動物行動学入門」(ハヤカワ文庫)	コンシード・ローレンス著岩波新書の「動物行動学入門」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
12「お母を打つ女」	シャン・サ 岩出書房	シャン・サ著(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	シャン・サ著(河出文庫)「おじい様の科学教室」(河出文庫)	映画「おやじの記」
13「お母の歌さん」	オズレット・バラザ 光文社古典新訳文庫	「ハーフ・サン」(河出文庫)「グランプリ(角川文庫)」(河出文庫)の百合子(新刊文庫)	「ハーフ・サン」(河出文庫)「グランプリ(角川文庫)」(河出文庫)の百合子(新刊文庫)	映画「おやじの記」
14「お手本全文史」	ミヅタ・アンド・ソニー 岩波書房新社	アラン・カーペンタ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	アラン・カーペンタ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
15「人気化の10万年史」—中川 稔	講談社ブルーバックス	鈴木光大著山口ひでる著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	鈴木光大著山口ひでる著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
16「お手本のある人生」	坂井伸一 講談社現代新書	福岡伸一著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	福岡伸一著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
17「お手本」	ブルース・チャーチ 講談社文庫	ローナ・ケイティ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	ローナ・ケイティ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
18「お手本の世界」	ローズ・マリ・リットル著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	R・S・タトタ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	R・S・タトタ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
19「お手本正伝」	クヌス・スコリング 著者不詳	佐江伸一著(河出文庫)「岩波少年文庫」(河出文庫)	佐江伸一著(河出文庫)「岩波少年文庫」(河出文庫)	映画「おやじの記」
20「お手本の歌」—ガルトの歌	坂中仁 講談社現代文庫	R・デカルト著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	R・デカルト著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
21「お手本の歌」	などいなだ 講談社文庫	などいなだ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	などいなだ著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
22「父ちゃんの歌」	ビネル・サレーム 白帝社	雅香葉子著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	雅香葉子著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
23「お手本おじさん」	森本新樹 文庫文庫	森本新樹著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	森本新樹著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
24「お手本と小さな中国の歌」—ゲイシ・ジル ハヤカワ文庫文庫	イーロン・マスク著(河出文庫)	イーロン・マスク著(河出文庫)	イーロン・マスク著(河出文庫)	映画「おやじの記」
25「リーハージャーの大蛇」	カレン・ヘンス 著者不詳	ジョン・スティーブンソン著(河出文庫)	ジョン・スティーブンソン著(河出文庫)	映画「おやじの記」
26「リーハージャーの巨乳妖」	大岡信編 著者不詳	岩波少年文庫	岩波少年文庫	映画「おやじの記」
27「小芸女の特攻兵」—東野圭吾著(河出文庫)	大岡信編 著者不詳	講談社現代新書	講談社現代新書	映画「おやじの記」
28「パトニア姫の少女」	ジン・ゴフラン 中公文庫	大貫晃一著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	大貫晃一著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
29「への言葉で」	ジョン・バーリー 講談社クレストブックス	ペル・ハル・リンドリング著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	ペル・ハル・リンドリング著(河出文庫)「おじい様の世界」(ハヤカワ文庫)	映画「おやじの記」
30「ほん、みのりんくつた!」	ジギタ・ギャンチ 講談社文庫	トマホーク著(河出文庫)	トマホーク著(河出文庫)	映画「おやじの記」
31「アーネスト・ヘン莱」	津島裕子 講談社文庫文庫	飯並和也著(河出文庫)「Xの後」(河出文庫)	飯並和也著(河出文庫)「Xの後」(河出文庫)	映画「おやじの記」
32「おじいさんの説教」	リチャード・ホール著(河出文庫)	ライアル・ソングス・ディグ・ネイティ—「おじい様の世界」(河出文庫)	ライアル・ソングス・ディグ・ネイティ—「おじい様の世界」(河出文庫)	映画「おやじの記」
33「ワイルド・アーバン」	コン・アーバン 講談社+α文庫	L・T・コーンズ著(河出文庫)	L・T・コーンズ著(河出文庫)	映画「おやじの記」
34「忘れられた日本人」	室本富一 講談社文庫	柳原敏雄著(河出文庫)	柳原敏雄著(河出文庫)	映画「おやじの記」
35「わたしを残さないで」	カスレ・イングロ ハヤカワ文庫	カスレ・イングロ著(河出文庫)	カスレ・イングロ著(河出文庫)	映画「おやじの記」

ったからでもある。気候や地形、生物や人類学、震災や避難所、中国と日本に関する作品を特徴とするのはそのためである。逆に言えば、筆者がヒトの現在と未来に関して切実に学んだもの、あるいは深甚な啓示を受けたものだけを選び、それを鮮やかに提示すること、あるいは黙示して気付いてもらうことが芸であり、授業なのである。

リストのテキストに対応した映像作品がある場合はそれを行末に示しているが、授業中にこれを視聴してもらってそのレポートを求める場合もある。また任意で文字作品と映像作品との比較レポートを提出して評価してポイントともしている。ただし映像作品に重きをおくつもりはなく、あくまで読み書きトレーニングの一環ないし導入として位置付けている。

読み書きトレーニングに関連して有効であったと思われる授業としては、以上のほかに、図書館のグループ学習室を利用し、ゲスト講師を招いて行った「読書へのアニメーション」がある⁹⁾。これは大学の授業としてはおもに図書館司書養成コースなどで行われているものであるが、3時間つきのコース（「表現と批評」）を利用して、全員が同一テキストを黙読した後、「あらすじ」の断片が書かれたカードを各自に箇引で配当しストーリーの流れに沿ってあらすじが完成するよう一列に並びなおしてもらう、また各自が本屋の店員となつたりでその作品の宣伝用popをつくりどのpopがすぐれているかを全員で投票するなど、身体的行為を伴うグループ学習である。さらに、筆者が出版にかかわってきた関係上、「判」と「版」の区別から本のページの具体的なめくり方までを示す「モノとしての本の意味・本のレッスン」や、「校閲・校正演習」も行った¹⁰⁾。そして最後の授業をC・S・ルイス著『ライオンと魔女』を素材に「リアル世界とファンタジー世界の反転」に触れた「左様ならば」でしめくくった。

5. まとめと謝辞

以上、独創無手勝流ながら本学着任以降4年間の試行錯誤の一端を披露した。まことに教えることは学ぶこと 'Homines, dum docent, discunt' (A・L・セネカ) であった。「芸」についてはすでに触れたが再確認しておくとすれば、トレーニング類の負荷と併せ、自らの学びの現在を可能な限りフレッシュな切斷面として、あるいは血色の乾かぬそれとして履修生の脳裡に刻印できれば、それは芸としてまた授業として目的を達し得たと言えるだろう。

客員任期満了を前に、こうした学びの場を与えてくださった本学コミュニケーション学部前学部長川浦康至先生はじめ学部の先生方、職員の方々、またゲスト講師として授業にお力添え下さった方々、そして「基礎読書」に深い理解を示され、2016年度7月から「岩波少年文庫」シリーズを配架してくださった本学図書館の方々に、厚く御礼申し上げる。また拙い芸と強引な誘導に付き合ってくれた履修生たちにも忘れず感謝しておきたい。

註

- 1) 大槻文彦『言海』1889年, p.168。
- 2) 国立教育研究所『日本近代教育百年史』第三卷学校教育1, 1974年, pp.272-279, pp.800-802。
- 3) 大槻文彦『言海』1889年, p.498。
- 4) 湯浅忠良『広益熟字典』画引之部, 1874年, p.111。
- 5) 白川静『字通』1996年, pp.413-414。
- 6) 折口信夫「日本芸能史六講」『折口信夫全集』21, 1996年, pp.20-21。
- 7) (無記名)「大学生でも、おとなでも、基礎読書200」(リスト)『季刊 Collegio』No.62, Summer 2016年, pp.60-63。
- 8) (無記名)「基礎読書100」(リスト)『季刊 Collegio』No.65, Summer 2017年, p.55。
- 9) 青柳啓子「大学生の主体的な読みを引き出すには」『季刊 Collegio』No.69, Autumn 2018年, pp.58-66。
- 10) 2016年10月5日から12月7日の間10回にわたって日本テレビ系で放映された石原さとみ主演のドラマ「地味にスゴイ！」校閲ガール・河野悦子。現在ではdvd作品として視ることができる。原作は宮本あや子『校閲ガール』(2014年初版)。授業ではdvdの第1話を視聴(巡査には、偶々国分寺付近のロケ地も含まれた)した後に、現役の雑誌校正者から話を聞き、さらに「まちがいさがし」の時間を設けた。ただし授業の冒頭において、以下の7段落の文章(筆者のオリジナル文)をそれぞれ40字(原稿用紙2行以内)にまとめる「要約エクササイズ」を行い、予備知識の導入とした。

① 校正とは、出版や放送・放映、廣告や看板などの公示、インターネットでの発信を含めたすべてのコミュニケーション・メディアにおいて、その表現形式(表記)と内容を確定する最終段階におけるチェック・プロセスのことである。

② 校正者の仕事はおもに表記に間違いがないかを確認することであるが、多くの場合原稿の誤認を正したり、記載の曖昧な部分について再確認することも必要となる。表記よりも内容に踏み込んだ領域については「校閲」と呼ぶことがある。校正者にもっと必要なのは一般常識であるが、懷疑的もしくは探求的な資質も重要である。

③ 大きな出版社や新聞社では編集部のほかに、印刷前の最終チェックを専門に行う校正部ないし校閲部を社内にも、そこで社員もしくは契約したフリーランスの校正者などが全印刷物の校正と校閲を受け持つことが多い。

④ 中小の出版社などでは、編集部が担当出版物ごとに校閲、校正を行なうか、あるいはその作業を外注するのが一般的である。社の内外での校正を区別して、「内校」(うちこう)「外校」(そとこう)と言うことがある。フリーランスの編集者や校正者のための養成講座は数多く開かれている。

⑤ 印刷出版物の校正の手順は、入力原稿を出力した「校正紙」をチェックすることから始まる。校正紙を「グラ」と言うが、グラとは元来活字を並べる枠箱を意味していた。レイアウトされていない文字だけの校正紙は「棒グラ」と呼ばれる。

⑥ 校正は一回目を初校といい、修正や疑問の箇所がなくなる「校了」まで、二校(再校)、三校と校正担当者を交代しながら繰り返るのが原則である。最後の校正を「念校」と言うことがある。訂正された状態を確認せず、訂正指示のみで校正を終えることを「費了」と言う。

⑦ 校正を軽視するとメディアに数多くの、または致命的な誤記が発生する。そのため『論語』をもじった「校正費(おそ)るべし」の警句がある。致命的な誤記は人名や社名、地名などの固有名詞や、數値表記に発生しやすい。最近ネットなどの根拠や責任の明らかでないメディアを引用しているは出典とした出版物をよく見かけるが、これも校正軽視の一端である。